

一般演題（ポスター） | 一般演題（ポスター発表）：オーラルフレイル・口腔機能低下症

■ 2025年6月29日(日) 12:50 ~ 13:20 ■ ポスター発表9（幕張メッセ展示ホール8）

オーラルフレイル・口腔機能低下症

[P-100]

急性期病院におけるがん周術期患者のオーラルフレイルに関する実態調査の取り組み

○市ノ澤 将史¹、大平 真理子²、高橋 光¹、高久 勇一郎¹、山下 秀一郎² (1. 東京都立豊島病院 歯科口腔外科、2. 東京歯科大学 パーシャルデンチャー補綴学講座)

[P-102]

オーラルディアドコネシス発音時の発音明瞭度と口腔機能の関連性検討

○安藤 万乃¹、青山 薫英¹、留岡 諭志¹、荒木 尋斗¹、南 翔太²、武重 百香²、廉 キン²、内山 千代子¹、栗田 啓¹ (1. ライオン株式会社 口腔健康科学研究所、2. ライオン株式会社 デジタル戦略部)

[P-104]

65歳以上の自立女性に対する食事指導と運動指導を含む6か月間の口腔機能管理の筋肉量への効果

○太田 緑¹、大沢 由茉²、上田 貴之¹ (1. 東京歯科大学老年歯科補綴学講座、2. 東京歯科大学水道橋病院歯科衛生士部)

[P-106]

外来通院患者に対するオーラルフレイル対策プログラムの有用性検討

○加藤 陽子^{1,2}、青山 薫英³、内山 千代子³、菊谷 武^{1,2} (1. 日本歯科大学 口腔リハビリテーション多摩クリニック、2. 日本歯科大学附属病院 口腔リハビリテーション科、3. ライオン株式会社 口腔健康科学研究所)

[P-108]

舌圧を増強させる舌蓋押し当て訓練は咀嚼嚥下機能を改善する

○並木 千鶴^{1,2,3}、原 豪志^{2,3}、柳田 陵介¹、奥村 拓真⁴、小林 健一郎²、谷口 裕重⁵、戸原 玄¹ (1. 東京科学大学大学院 医歯学総合研究科 摂食嚥下リハビリテーション学分野、2. こばやし歯科クリニック、3. 衣笠あかり訪問歯科クリニック、4. 北海道大学大学院歯学研究院 口腔健康科学分野 高齢者歯科学教室、5. 朝日大学歯学部摂食嚥下リハビリテーション学分野)

[P-110]

地域住民のオーラルフレイル認知度向上に関連する啓発手段の検討：神奈川県平塚市での地域啓発の取組より

○池田 健太郎¹、田子森 順子^{2,1}、佐藤 麻美^{2,3}、溝口 奈菜¹、楠本 奈央¹、永谷 美幸¹、前田 真理子¹、田中 友規^{2,4}、飯島 勝矢^{2,4} (1. サンスター株式会社、2. 東京大学 高齢社会総合研究機構、3. 神奈川県平塚市役所、4. 東京大学 未来ビジョン研究センター)

[P-112]

地域在住高齢者における機能歯数と終末糖化産物の関連：お達者健診研究

○細川 知隆^{1,2}、岩崎 正則^{2,3}、白部 麻樹²、本川 佳子²、五味 達之祐²、枝広 あや子²、大淵 修一²、平野 浩彦²、正木 千尋¹、上野 結衣¹、細川 隆司¹ (1. 九州歯科大学大学院歯学研究科 口腔再建リハビリテーション学分野、2. 東京都健康長寿医療センター研究所、3. 北海道大学大学院歯学研究院)

[P-114]

80歳以上の高齢者におけるOF-5によるオーラルフレイルの評価と全身状態の関連性

○安田 悠¹、西尾 健介¹、吉田 貴政¹、松浦 玄武¹、柳澤 直毅¹、岡田 真治¹、西川 美月¹、伊藤 智加¹、飯沼 利光¹ (1. 日本大学歯学部)

一般演題（ポスター） | 一般演題（ポスター発表）：オーラルフレイル・口腔機能低下症

 2025年6月29日(日) 12:50～13:20
  ポスター発表9（幕張メッセ展示ホール8）

オーラルフレイル・口腔機能低下症

[P-100] 急性期病院におけるがん周術期患者のオーラルフレイルに関する実態調査の取り組み

○市ノ澤 将史¹、大平 真理子²、高橋 光¹、高久 勇一郎¹、山下 秀一郎² (1. 東京都立豊島病院 歯科口腔外科、2. 東京歯科大学 パーシャルデンチャー補綴学講座)

【目的】

東京都立豊島病院（以下当科）は年間420症例（令和5年度）のがん手術症例を有する急性期病院である。がん手術予定の患者に対し、多職種で構成される入院サポートチームで挿管時の誤飲・誤嚥リスク因子である動揺歯の精査・処置を始め、術前から術後に渡る口腔衛生管理を行っている。当科においては、対象者に対し入院サポートの一環として年間約400件の周術期口腔機能管理を行っているが、口腔ケアや急性症状のある歯に対する応急的な治療が中心となっている。しかし、過去には胃がんの術前患者に口腔機能の低下を認めた報告もあり、術前に口腔機能が低下していることが分かれば、術後や退院後の口腔機能の低下を予測し、適切なサポートにつなげられるのではないかと考えた。2024年に発表されたOral frailty 5-item Checklist（OF-5）は、5つの質問からなるアンケート形式の評価法であり、5項目中2つ以上に当てはまる場合は『オーラルフレイル』と判定するものである。そこで、無自覚のオーラルフレイル患者を抽出し適切なサポートにつなげるために、がんの手術予定で周術期口腔機能管理の依頼のあった患者にOF-5の実施を開始した。今回、当院で開始した取り組みについて報告する。

【方法】

2024年11月～12月に周術期口腔機能管理のために当科受診をした患者のうち認知機能に問題がなくOF-5に回答できた10名について、OF-5、口腔内診察、基本チェックリスト（KCL）、咀嚼機能評価表、オーラルディアドコキネシスを実施した。

【結果と考察】

OF-5で評価したところ、10名中6名にオーラルフレイルに該当した。該当者全員が口腔乾燥感を自覚していた。また、該当者のうち4名はOF-5の調査票では滑舌の低下を自覚していなかったが、オーラルディアドコキネシスでスコアの低値を認めた。このことから、主観的な症状のない無自覚のオーラルフレイル患者がいることが判明した。今後は入院サポートチームでの問診にOF-5を取り入れ、無自覚のオーラルフレイル患者を見つけ出し、当科での適切な評価や介入を開始し、退院後にはかかりつけ歯科での口腔衛生管理および口腔機能管理を継続できる仕組みや、当院リハビリテーション科との連携を構築していきたい。

（COI 開示：なし）

（東京都立豊島病院 倫理委員会承認番号 倫臨迅6-80）

一般演題（ポスター） | 一般演題（ポスター発表）：オーラルフレイル・口腔機能低下症

2025年6月29日(日) 12:50～13:20 Poster発表9（幕張メッセ展示ホール8）

オーラルフレイル・口腔機能低下症**[P-102] オーラルディアドコキネシス発音時の発音明瞭度と口腔機能の関連性
検討**

○安藤 万乃¹、青山 薫英¹、留岡 諭志¹、荒木 尋斗¹、南 翔太²、武重 百香²、廉 キン²、内山 千代子¹、栗田 啓¹ (1. ライオン株式会社 口腔健康科学研究所、2. ライオン株式会社 デジタル戦略部)

【目的】

舌口唇運動機能の検査（オーラルディアドコキネシス）では、/pa//ta//ka/の1秒当たりの発音回数が測定される。一方、口腔機能低下に伴い発音の明瞭度も低下することが臨床知見として知られているが、明瞭度を客観的に評価し口腔機能との関連を調査した報告はほとんどない。そこで、/pa//ta//ka/発音の音響学的な特徴から明瞭な発音か否かを判定することで、明瞭度を評価するアルゴリズムを開発した。本研究は、オーラルディアドコキネシス発音時の発音明瞭度と口腔機能の関連性を検討することを目的とした。

【方法】

2024年6月～8月に、25～74歳の健常成人80名を対象とし、口腔機能に関する検査（オーラルディアドコキネシス、舌圧、咬合力、咀嚼能率、RSST）、口腔内の検査（残存歯数、う蝕経験歯数、アイヒナー分類、機能歯ユニット、アングルの分類）、体組成の測定を行った。また、生活習慣や口腔の自覚症状に関する情報をアンケートにより聴取した。オーラルディアドコキネシスの検査の際には、発音時の音声データを録音した。その後オプトアウトを実施し、研究利用（2次利用）の同意を撤回しなかった78名（男性40名、女性38名、平均年齢49.7±14.3歳）を対象に、オーラルディアドコキネシス発音時の発音明瞭度と口腔機能の各検査結果との相関解析を行った。また、口腔機能の各検査結果をそれぞれ目的変数とし、オーラルディアドコキネシス発音時の発音明瞭度、発音回数、年齢、性別等を説明変数とした重回帰分析を行った。

【結果と考察】

被験者全体では発音明瞭度と口腔機能の各検査結果の間に有意な相関は認められなかったが、口腔機能低下症の診断対象である50歳以上の被験者群では、発音明瞭度と一部の口腔機能の検査結果の間に有意な相関を認めた。また、重回帰分析の結果、調整因子の影響を考慮しても舌圧等の口腔機能の検査結果と発音明瞭度との間に有意な関連が認められた。以上のことから、今回開発した発音明瞭度が口腔機能の評価指標の1つとして有用である可能性が示唆された。

（COI 開示：ライオン株式会社）

（ライオン株式会社倫理審査委員会 臨床審査No.395、No.398）

一般演題（ポスター） | 一般演題（ポスター発表）：オーラルフレイル・口腔機能低下症

 2025年6月29日(日) 12:50～13:20
  ポスター発表9（幕張メッセ展示ホール8）

オーラルフレイル・口腔機能低下症

[P-104] 65歳以上の自立女性に対する食事指導と運動指導を含む6か月間の口腔機能管理の筋肉量への効果

○太田 緑¹、大沢 由菜²、上田 貴之¹ (1. 東京歯科大学老年歯科補綴学講座、2. 東京歯科大学水道橋病院歯科衛生士部)

【目的】

口腔機能低下症の管理においては、栄養状態も含めて全身状態を把握することが推奨されている。栄養状態の悪化は、サルコペニアといった筋肉量の低下を引き起こす。本研究の目的は、65歳以上の自立女性を対象に、口腔機能検査および筋肉量の評価を行い、食事指導と運動指導を含む6か月間の口腔機能管理が口腔機能と全身の筋肉量に与える影響を検討することとした。

【方法】

東京歯科大学水道橋病院補綴科で口腔機能低下症の検査を実施した65歳以上の女性20名（平均年齢77±5歳）を対象とした。口腔機能精密検査（舌背上総微生物数、口腔水分量、咬合力、オーラルディアドコキネシス、舌圧、咀嚼能率、嚥下機能）に加えて、BIA法による体組成計(InBody S10)にて除脂肪量(kg)および四肢骨格筋量(kg)を測定し、除脂肪指数(FFMI)と骨格筋指数(SMI)を算出した。初回検査時と3か月後に食事指導と運動指導を含む口腔機能訓練の指導を行った。初回検査時と6か月後をWilcoxonの符号付順位検定を用いて比較した($\alpha=0.05$)。

【結果と考察】

初回検査時、FFMIの基準値である15を下回る者は5名(25%)だった。また、サルコペニア診断時のSMIの基準値である5.7を下回る者は2名(10%)だった。咬合力(N)の中央値（四分位範囲）は、初回検査時414.4(248.2-464.3)が、6か月後に472.0(363.0-528.3)Nとなり、両群間に有意差を認めた。他の口腔機能では有意差を認めなかった。筋肉量の指標では、FFMI(kg/m²)は16.0(14.9-16.6)が16.0(15.1-16.6)に、SMI(kg/m²)は7.0(6.4-7.6)が7.2(6.3-7.5)となり、FFMIでのみ両群間に有意差を認めた。高齢になると筋繊維数の低下や筋繊維の委縮により筋肉量を増やすことが難しくなるが、本研究の結果から食事指導と簡単な運動指導を含めた6か月間の口腔機能管理により、高齢者のFFMIが増加することが明らかとなった。

(JSPS科研費JP21K17073)

(COI開示：なし)

(東京歯科大学倫理審査委員会承認1069)

一般演題（ポスター） | 一般演題（ポスター発表）：オーラルフレイル・口腔機能低下症

 2025年6月29日(日) 12:50～13:20
  ポスター発表9（幕張メッセ展示ホール8）

オーラルフレイル・口腔機能低下症

[P-106] 外来通院患者に対するオーラルフレイル対策プログラムの有用性検討

○加藤 陽子^{1,2}、青山 薫英³、内山 千代子³、菊谷 武^{1,2} (1. 日本歯科大学 口腔リハビリテーション多摩クリニック、2. 日本歯科大学附属病院 口腔リハビリテーション科、3. ライオン株式会社 口腔健康科学研究所)

【目的】

口腔機能トレーニングとしては口腔体操等が挙げられるが、種類が多く、自身の状態に適した方法を理解・選択して実践することは難しい。そこで演者らは、専用のキットとスマートフォンアプリで簡便に口腔機能を評価し、利用者に適したトレーニングメニューを提供するオーラルフレイル対策プログラム（以下、ORAL FIT）を開発した。本研究では、口腔機能低下が認められる外来通院患者に対するORAL FITの有用性検討を目的とした。

【方法】

2022年4月から2023年4月までの間、日本歯科大学口腔リハビリテーション多摩クリニックを外来受診した口腔機能の低下が認められる患者19名（男性10名、女性9名、平均年齢78.62±6.58歳）を対象（介入群）とした。介入群には、口腔機能精密検査（舌苔の付着程度、口腔粘膜湿潤度、咬合力、オーラルディアドコキネシス（以下ODK）、舌圧、咀嚼能力、EAT-10）及び通常の診療内で行われる口腔機能管理を行い、並行して2か月間ORAL FITを体験させた。被験者はORAL FIT体験開始時にキットとアプリを用いて口腔機能を自己評価し、結果を基に提案されたコースを自身で選択し毎日配信される動画に沿ってトレーニングを実施した。ORAL FIT体験終了後、アンケート調査・口腔機能検査を実施し、口腔機能の改善実感有無の集計、ORAL FIT体験前後の口腔機能精密検査の値の比較を行った。また探索的検討として、対象期間中に同クリニックで口腔機能管理を受け、ORAL FITを体験しなかった外来患者から外部対照群を抽出し、口腔機能管理前後の口腔機能精密検査の値の変化率について介入群と比較した。

【結果と考察】

介入群19名中15名が試験を終了した。体験終了後のアンケートでは、15名中10名が「噛むことを意識するようになった」、8名が「むせることが減った気がする」「頬や舌を噛むことが減った気がする」と回答し、ORAL FITが通院患者の行動変容・口腔機能トレーニングに有用である可能性が示された。口腔機能精密検査の値はいずれもORAL FIT体験前後で有意な変化を認めなかった。一方でODK /ka/の変化率は、ODK /ka/の初期値・年齢・性別を用いた傾向スコアマッチングの結果、口腔機能管理のみ受けた外部対照群と比べ、口腔機能管理に加えORAL FITを体験した介入群において有意に高値を示した。本研究はサンプルサイズ不足などの研究限界があるため、今後最適な試験設計の下、ORAL FITが口腔機能に及ぼす影響を明らかにしていく。

（COI 開示：ライオン株式会社）

（日本歯科大学 倫理審査委員会承認番号 NDU-T2021-60）

一般演題（ポスター） | 一般演題（ポスター発表）：オーラルフレイル・口腔機能低下症

 2025年6月29日(日) 12:50 ~ 13:20
  ポスター発表9（幕張メッセ展示ホール8）

オーラルフレイル・口腔機能低下症

[P-108] 舌圧を増強させる舌蓋押し当て訓練は咀嚼嚥下機能を改善する

○並木 千鶴^{1,2,3}、原 豪志^{2,3}、柳田 陵介¹、奥村 拓真⁴、小林 健一郎²、谷口 裕重⁵、戸原 玄¹ (1. 東京科学大学大学院 医歯学総合研究科 摂食嚥下リハビリテーション学分野、2. こばやし歯科クリニック、3. 衣笠あかり訪問歯科クリニック、4. 北海道大学大学院歯学研究院 口腔健康科学分野 高齢者歯科学教室、5. 朝日大学歯学部摂食嚥下リハビリテーション学分野)

【目的】

歯数の減少や口腔周囲筋の機能が低下すると咀嚼障害を招く。高齢者における咀嚼障害は低栄養やフレイルに関連するためその対応は急務である。我々は、過去に舌を口蓋に押し当てる訓練(tongue pressure resistance training: TPRP)によって、舌圧や舌の巧緻性の向上のみならず、液体摂取時における咽頭期の嚥下動態が改善することを報告した。しかし、同訓練が咀嚼機能に及ぼす訓練は不明である。本研究は、咀嚼動態の観察が可能な嚥下造影検査(VF)を用いて、TPRPが咀嚼嚥下に及ぼす影響を調査したので報告する。

【方法】

対象は食事困難を自覚した高齢者のうちVFにより食塊形成不良を認めた高齢者16名(75.5歳±9.4)とした。訓練は舌を口蓋に強く押し当てる運動と、その後の休憩を10秒間ずつ行うことを5回繰り返すことを1日2回行い、1か月間継続した。咀嚼の評価は、VFにてバリウムケーキ4gを咀嚼した際の食塊形成能力と、咀嚼し始めてから嚥下するまでの時間(咀嚼時間)、咀嚼回数、食塊形成中の開口量を計測した。その他舌圧、オーラルディアドコキネシス(ODKR)のtaとkaを計測し、舌骨上筋群の評価はVFを用いて嚥下時の舌骨の変位量と咽頭残留量を計測した。統計はウィルコクソンの符号順位検定を用いて訓練前後の比較を行った。

【結果と考察】

訓練後、舌圧($r=0.83$)、ODKRのta($r=0.53$)とka($r=0.67$)、舌骨の前方変位量($r=0.62$)、咽頭残留量($r=0.77$)の他、食塊形成能力($r=0.79$)が有意に向上した(r :効果量)($p<0.05$)。その他、咀嚼時間($r=0.63$)が有意に短縮し、食塊形成中の開口量($r=0.52$)が有意に増加した($p<0.05$)。舌圧発生には舌骨上筋群が関与していることから、TPRPは嚥下機能を改善させるが、舌と舌骨上筋群の機能改善が、舌による食物の凝集や食塊保持力を高めたことで食塊形成能力が改善したと考えられた。よってTPRPは咽頭期における嚥下動態だけでなく咀嚼嚥下機能の改善にも効果があることが示唆された。

(COI開示:なし)

(東京医科歯科大学歯学部倫理審査委員会D2022-045)

一般演題（ポスター） | 一般演題（ポスター発表）：オーラルフレイル・口腔機能低下症

 2025年6月29日(日) 12:50～13:20
  ポスター発表9（幕張メッセ展示ホール8）

オーラルフレイル・口腔機能低下症

[P-110] 地域住民のオーラルフレイル認知度向上に関連する啓発手段の検討： 神奈川県平塚市での地域啓発の取組より

○池田 健太郎¹、田子森 順子^{2,1}、佐藤 麻美^{2,3}、溝口 奈菜¹、楠本 奈央¹、永谷 美幸¹、前田 真理子¹、田中 友規^{2,4}、飯島 勝矢^{2,4} (1. サンスター株式会社、2. 東京大学 高齢社会総合研究機構、3. 神奈川県平塚市役所、4. 東京大学 未来ビジョン研究センター)

【目的】

オーラルフレイル（以下、OF）は、生活者自身が早期に気づき、早期に予防することが重要である。本研究の目的は、特定地域へのOF予防啓発において、地域住民のOF認知度の向上と関連する啓発手段を明らかにすることである。

【方法】

2023年2～9月に神奈川県平塚市の特定地域においてOF予防啓発介入試験を実施した。地域住民の生活圏において多面的にOF関連情報への接触機会を増やす取組として、産官学民協働でフレイル予防講座、歯科医師によるセミナー、地域行事での展示、歯科医院等医療機関・公共施設・商業施設でのポスター掲示・リーフレット配布等を実施した。

平塚市在住65歳以上自立高齢者のうち、啓発前後の自記式質問票調査への回答者を対象に、OFの認知度及びOFの理解や予防意識の高さ、OF関連情報への接触場所・数を評価した。解析では、特定地域とその近隣地域を併せて啓発地域とし、主に性別と年齢を調整因子としたロジスティック回帰分析を用いた。なお、有意確率は5%未満をもって有意とした。

【結果と考察】

啓発地域（891名：74.6±6.5歳、女性52.5%）と非啓発地域（864名：75.5±6.5歳、女性59.9%）を比較したところ、啓発後のOF認知者が啓発地域で有意に多かった（オッズ比[95%CI]=1.32 [1.02-1.70]）。また啓発期間中にOFを初めて認知した者（以下、新規認知者）215名において、啓発後のOFの理解や予防意識が高い者は、理解が低い者と比較して啓発期間中の情報接触場所の数が有意に多かった。啓発地域の新規認知者においては、情報接触場所に歯科医院を挙げた者が30.5%で最も多く、次に配付された冊子・サンプルや市の広報等が続いた。特に非啓発地域との比較では歯科医院で情報に触れた者が啓発地域で有意に多かった（オッズ比[95%CI]=2.56 [1.21-5.42]）。

本結果より、多面的な手段による複数回の情報接触が地域住民のOF認知度や理解の向上に寄与し、特にOFの地域啓発では地域の歯科医院が重要な役割を果たすと考えられた。今回のような産官学民協働での多面的なOFの予防啓発活動は、OFの認知向上だけでなく地域住民のOF予防にも繋がる活動になるものと期待される。

（COI 開示：サンスター株式会社，他1社）

（東京大学 倫理審査委員会承認番号 22-443）

一般演題（ポスター） | 一般演題（ポスター発表）：オーラルフレイル・口腔機能低下症

 2025年6月29日(日) 12:50 ~ 13:20
  ポスター発表9（幕張メッセ展示ホール8）

オーラルフレイル・口腔機能低下症

[P-112] 地域在住高齢者における機能歯数と終末糖化産物の関連：お達者健診研究

○細川 知隆^{1,2}、岩崎 正則^{2,3}、白部 麻樹²、本川 佳子²、五味 達之祐²、枝広 あや子²、大淵 修一²、平野 浩彦²、正木 千尋¹、上野 結衣¹、細川 隆司¹ (1. 九州歯科大学大学院歯学研究科 口腔再建リハビリテーション学分野、2. 東京都健康長寿医療センター研究所、3. 北海道大学大学院歯学研究院)

【目的】終末糖化産物(Advanced Glycation Endproducts/AGEs)の蓄積はさまざまな疾患の原因、増悪因子として近年注目されている。AGEs蓄積量は食事内容に影響を受けることが報告されている。AGEs蓄積量が多いということは、全身組織の糖化が進行しており、様々な全身疾患の罹患リスクが高まっている可能性がある。機能歯数の低下は、食事内容変化による栄養素摂取バランスの偏りをもたらすとされている。そこで我々は、「機能歯数の低下はAGEsの蓄積量を増加させる」との仮説の下、地域在住高齢者における機能歯数とAGEsとの関連について検討した。

【方法】2023年実施の65歳以上の地域在住高齢者を対象とした来場型健診（お達者健診研究）参加者のうち、データ欠損のない者を解析対象とした。AGE Reader (Diagnoptics Technologies B.V.社製)を用い、原則として利き腕前腕内側の肘関節付近の表皮で3回位置を変えて測定し、AGEsスコアの平均値を算出した。この値が高いほど測定部位の皮膚にAGEsが蓄積しており、全身組織の糖化が進行している傾向があることを意味する。機能歯数は口腔診査結果から求めた。目的変数をAGEs、説明変数を機能歯数、共変量を年齢、性別、教育年数、喫煙状況、飲酒習慣、併存症の数とする重回帰分析を用いて機能歯数とAGEsの関連を評価した。

【結果と考察】研究対象集団（570名 [男性213名、女性357名]、平均年齢73.7歳）におけるAGEsの平均値（標準偏差）は2.40（0.41）であった。重回帰分析の結果、機能歯数はAGEs蓄積量と統計的に有意に関連していた（機能歯1歯増加ごとのAGEsに対する非標準化回帰係数 [95%信頼区間]= -0.016[-0.026 to -0.006]）。本研究から、65歳以上の地域在住高齢者において、機能歯数が多いということはAGEs蓄積量が低く、組織の糖化度が低いことと関連することが示唆された。しかし本研究は横断研究であるため、機能歯数とAGEs蓄積量の関係を利用した健康増進へ寄与する方法を導き出すには、今後は経時的なAGEs蓄積量を評価する縦断研究が必要である。

（COI 開示：なし）

（東京都健康長寿医療センター研究倫理審査委員会承認番号 R22-034）

一般演題（ポスター） | 一般演題（ポスター発表）：オーラルフレイル・口腔機能低下症

歯 2025年6月29日(日) 12:50 ~ 13:20 血 ポスター発表9（幕張メッセ展示ホール8）

オーラルフレイル・口腔機能低下症**[P-114] 80歳以上の高齢者におけるOF-5によるオーラルフレイルの評価と全身状態の関連性**

○安田 悠¹、西尾 健介¹、吉田 貴政¹、松浦 玄武¹、柳澤 直毅¹、岡田 真治¹、西川 美月¹、伊藤 智加¹、飯沼 利光¹ (1. 日本大学歯学部)

【目的】

2024年4月にオーラルフレイル（Oral frailty : OF）の新たな評価指標である「Oral frailty 5-item Checklist（OF-5）」が発表され、OFのさらなる社会への普及が期待されている。しかし、OF-5により評価されたOFと全身状態との関連性については、エビデンスが未だ不十分である。さらに、わが国の平均寿命の延長に伴い、より高齢な世代におけるOFと全身状態の関連性が注目されている。そこで本研究では、80歳以上の高齢者を対象に、OF-5で評価されたOFと複数の全身状態の関連性について検討した。

【方法】

当講座では日本大学歯学部同窓会の協力を得て、80歳以上の口腔症状が安定している患者を対象に、口腔の健康と身体・精神的健康状態に関する疫学調査を実施している。本発表では、令和3年5月～令和6年10月の間に調査に参加した154名の結果を報告する。OFの評価はOF-5を用いて行った。全身状態は質問票により認知機能（MMSE）、日常生活動作

（ADL）、精神健康状態（WHO-5）、食事への満足度、フレイルについて評価し、MMSEは<24、ADLは<100、WHO-5は<13を低下ありとし、フレイルは基本チェックリスト合計点>6をフレイルありと判定した。統計解析はOFの有無と全身状態の5項目について、 χ^2 検定で解析した後に、有意な差を認めた項目に対して、OFの有無が与える影響をロジスティック回帰分析にて評価した。

【結果・考察】

被験者のOF該当率は51.3%（81人）であった。OFの有無と全身状態に関して、OF+の被験者の方はOF-の被験者に比べ、ADL（ $P = 0.009$ ）WHO-5（ $P < 0.001$ ）の低下者が有意に多く、さらにフレイルの被験者が有意に多かった（ $P < 0.001$ ）。ロジスティック回帰分析の結果では、ADLの低下（OR：5.137, $P = 0.040$ ）、WHO-5の低下（OR：7.676, $P = 0.002$ ）、フレイル（OR：4.026, $P = 0.001$ ）は有意な結果を示した。

本研究の結果より、80歳以上の高齢者においても、OF-5で評価されたOFの有無と全身状態に関連性があることが示された。

（COI開示なし）

（日本大学歯学部倫理委員会承認番号：EP20D-001）